

第 115 回公開シンポジウム

誕生のインファンティア ～子どもはどんな不思議を体験しているのか～

◆ プレゼンター 西 平 直
京都大学大学院教育学研究科教授／教育人間学

◆ パネリスト 白 川 蓉 子
元甲南女子大学教授・神戸大学名誉教授／幼児教育学

◆ 司 会 一 色 伸 夫
甲南女子大学総合子ども学科教授／子どもメディア学

一色：第 115 回「子ども学」講演会を始めます。「誕生のインファンティア～子どもはどんな不思議を体験しているのか～」というタイトルですが、おもしろそうな、そしてむずかしそうなテーマですね。子どもの頃、誕生について何か不思議を感じたことはありませんか。赤ちゃんはどこから来ると思っていましたか。死んだらどうなるの？ と思ったことはありませんか。「生まれる前、僕はどこにいたの」と尋ねた少年のこと、「子どもの頃、母親に『僕は今どうして生きているの？』と責めて困らせたことがありました」と書いた学生のことなどもお話ししたいと思います。今日は哲学のお話です。

プレゼンターとして京都大学大学院教育学研究科教授の西平直先生に来ていただきました。西平先生のご専門は教育人間学、宗教心理学、死生学、哲学、人間の成長や成熟の問題を心理学、教育学、宗教学、倫理学などさまざまな思想から学びながら幅広く研究されている方です。主な著書に『エリクソンの人間学』『魂のライフサイクル』『教育人間学のために』『世阿弥の稽古哲学』『無心のダイナミズム』、そして今日のテーマである『誕生のインファンティア - 生まれてきた不思議・死んでいく不思議・生まれてこなかった不思議』などがあります。

そしてパネリストとして白川蓉子先生に来ていただきました。白川先生には、甲南女子大学総合子ども学科で教授としてご指導頂きました。神戸大学名誉教授でもあり、幼児教育学がご専門です。子どもの遊びと学びと発達、フレーベルやモンテッソーリの幼児教育プログラムの検討、多文化における幼児教育プログラムなどを研究されています。ご著書は『育ちあう乳幼児教育保育』『「モンテッソーリ・メソッド」入門』『フレーベルのキンダーガルテン実践に関する研究』などがあります。

では、西平先生、プレゼンターとしてお話をお願いします。よろしくお願いいたします。

西平：こんにちは。西平です。

皆さん、子どもの頃のことを思い出すことがありませんか。もしかしたら、おじいちゃんやおばあちゃんのところに行ったときに、子どもの頃の話になることがあるかもしれないですね。試しに、高校の頃までおじいちゃんおばあちゃんと暮らしていた方、どのくらいおられますか？ そう、ほとんどおられない、10人くらいですね。では、今までにおじいちゃんやおばあちゃんが亡くなられた方、あるいは、お葬式にでたことがある方は、どのくらいいますか。今度はもう少し多いですね。もしかしたら、おじいちゃんのお父さんとか、もう一つ上の世代のお葬式かもしれないね。でも驚きました。身内の方の葬儀に参加されたことがあるんですね。

僕は祖母、母の母に育てられました。そのためか、子どもの頃から、祖母の方が早く死んでしまふのだなと気にしていました。どうしてそう考えたのか、覚えはないのですが、おばあちゃんの方が先に死んでしまふ、寂しいな、と思っていました。おばあちゃんが先に死んだら、いずれ僕もその後を追いかけていくんだろう、でも、またおばあちゃんが先に死んで、そうしたらまた僕も後を追いかけていくのかな、などと考えながら、これはきっと「本当のこと」ではないだろうと思っていました。でも、誰にも尋ねたことはなかったんです。死んだらどうなるのか。

そんなことがあったためか、大人になり大学の先生になってからは、毎年学生たちに聞くよう

誕生のインファンティア ―子どもはどんな不思議を体験しているのか

甲南女子大学、「こども学」講演会 2017年11月2日 西平 直（京都大学）

0、子どもの頃、死んだらどうなる、と思っていたか。

1、子どもの頃、誕生について不思議を感じたことはなかったか。

1-1、赤ちゃんはどこから来ると思っていたか。

「僕は卵を産んだことがある」少年ハンス（フロイト）

「生まれる前、僕はどこにいたの」少年フリッツ（M.クライン）

1-2、夭折した兄弟 →「仏壇の上に赤ん坊の写真がありました」

1-3、*「私を育ててくれた父親は、実の父ではありません。父は私が誕生して間もなく死んだため、母は再婚しました」（*は学生レポート）。

2、「生まれてきてよかった」（感謝）と「生まれてこない方がよかった」（未生欲）

*「子どもの頃、母親に、なぜ僕を生んだのかと責めて困らせたことがありました」。

*「本当は私が生まれてこなかった方が良かったのか。本当はそう思っているのか」。

2-1、「なぜ私を生んだのか」―未生欲

そもそも自分を存在させたことに対する恨み

待ち望まれて生まれた子。望まれずに生まれてきた子。

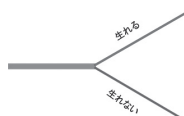
2-2、生まれてきてよかった 誕生への感謝

―アレント「出生性」

2-3、「気がついた時には、いた」―ハイデガー「被投性」と九鬼周造「偶然性」

「投げ込まれている」。「偶然を運命として受けとめようとする」。

3、生まれてこなかった子どもの「声」



*「私はある時期、自分には生れないことを選ぶ可能性があったのに、その道を選ばなかったということ、繰り返し考えていました。」

芥川龍之介『河童』 「お前はここの世界へ産まれてくるかどうか、よく考へた上で返事をしろ」。

3-1、オリアーナ・ファラーチ『生まれてこなかった子どもへの手紙』（竹山博英訳、講談社、1977）

「プレボテンツァ」⇒大いなるいのちの摂理の圧倒的な力

夢の中で「生まれてこなかった子ども」が証言台に立つ。

「僕は生まれることを望みませんでした」。

⇒私たちには、生まれてこない道があった。

3-2、増谷雄高『死霊』 「生まれてこなかった胎児」が語るという舞台設定

「ひとつの生」は殺戮の上に成り立つ。

⇒何が「存在する」とは、何を「存在させない」こと。

⇒別の何かを「存在させないこと（抑圧・抹消・殺害）」から免れることはできない。

*「もしあの時流産していなければ、あなたは生まれていないわよ」。

*「その子が生まれなかったおかげで、私は生まれてきた」。

「生まれてきた子どもたち」だけが特権的に脚光を浴びる非対称性の世界

⇒「原・未出現」（生まれてきた者と生まれてこなかった者が同じ資格で溶け合う）

4、不生の地平 ―盤往羅師「不生」 鈴木大拙「盤理の不生論」『全集』第一巻）

4-1、不生（生まれてこないいのち）⇔ 生死（生まれてきて死ぬいのち）

不死との違い

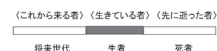
未生との違い

⇒「不生」が、今も、働いている。

⇒「生きている者」も（先に逝った者）も

（これから来る者）も（決して来ることの

ない者）も、すべてが溶け合う始原の地平。



不生

不生から見ると等距離になる

4-2、私たちは皆、生まれてこない可能性があった

⇒生れてきたいのち＞だけではなく、生れてこなかったいのち＞も大切にすること。

その広がりの中で「生まれてきたいのち」を育むこと。

西平 直『誕生のインファンティア―生まれてきた不思議、死んでゆく不思議、生まれてこなかった不思議』（みすず書房、2015年）

参考資料：講演会当日配布のレジュメ

にしています。「子どものとき、人が死んだらどうなると思っていたか」、「それを誰かに質問したことがあったか」。

いろいろな答えが出てきます。たとえば、ある学生は、「すべての人が死ぬと初めて気が付いた日のことをよく覚えている」と言います。彼はそれまで、人はピストルで撃たれたり、事故に遭って死ぬと思っていた。ところが、ある日、人はピストルで撃たれなくても、事故に遭わなくても死んでしまうと聞いた。じゃあ、みんな死んじゃうのかと、そのことに初めて気が付いたのだそうです。そしてあまりに怖くなって家に逃げ帰りベッドで泣いていた。お兄さんが来て、大丈夫かと言ってくれたのをよく覚えているというのです。

また、ある人は、こんなことを書いていました。「子どもの頃、寝前の時間が嫌でした。僕が死後のことを考えるのはいつもこんな時間でした。真っ暗な宇宙の中に一人浮かんでいる感じ。何の音もしない。誰もいない。途方もない寂しさが押し寄せて来て、僕は毎回泣きながら母を呼んだ」。

1. 子どもの頃、誕生について不思議を感じたことはなかったか

こうした死を巡る話も面白いのですが、今日は、誕生について考えてみたいと思います。「子どものときに誕生について何か不思議を感じたことはあるか」、「赤ちゃんはどこから来るのかと考えたことはあるか」、「それを誰かに聞いたことがあるか」、「どのように答えてもらえたか」、そうした質問です。

例えば、ある学生は、お母さんに尋ねたところ、「お父さんとお母さんが仲がいいと生まれるのよ」と説明してくれたそうです。「さて、どういうことか」とすごく考えたと言います。別の学生によると、「お母さんのおなかの中に赤ちゃんがいることは知っていた」。ちなみに、子どもたちはずいぶん小さな頃から、「お母さんのおなかの中に赤ちゃんがいる」ということを知っているようです。自分がおなかの中にいたことを記憶しているのか、それとも誰かから話を聞くのか。ところが、その学生はその先を考えた。「赤ちゃんはどうやっておなかの中に入るのだろうか、そして、どうやっておなかの中から出てくるのだろうか、おなかの中に赤ちゃんがいるなら、産むときにはおなかを切らなければならないのに、お母さんのおなかにはどうして傷がないのだろうか」。そう思いながら、なぜか、誰にも聞いたことがなかったというのです。なぜ聞かなかったんだろうか。実はここにも、考えてゆくと、重要な問題が潜んでいます。

しかし今は、もう少し別の報告を紹介します。帝王切開で生まれてきた人たちです。毎年、数人います。その学生たちは、お母さんのおなかに傷跡を見つけます。そして「ここから生まれてきたんだよ」と話を聞かせてもらいます。では、こういう「おなかの傷」という目に見える痕跡がない場合、子どもたちはどんなふうに考えるのかということなのです。

しかし実は、誰もが、親から「自分の誕生（出生・出産）」の話を聞かせてもらえるわけではありません。ちょっと聞いてみますね。お父さんお母さんから話を聞かせてもらったことがある方、どのくらいいますか。ありがとう、半分くらいかな。今からお話しますが、これは当たり前のこ

とではないんです。聞かせてもらえたのは本当に幸せなことなのです。

なお、学生達の報告には、「おまえは橋の下から拾われてきた」という話が、毎年出てきます(笑)。なぜか「橋の下」が多いですね(笑)。

赤ちゃんはどこから来ると思っていたか（フロイトとクライン）

フロイトという人、聞いたことがあるんじゃないでしょうか。精神分析の。実は、フロイトの周りにいた大人たちは、こうした「子どもの不思議」を集めていました。子どものたわいもない言葉、どうでもいいようなおしゃべりをしている言葉を、一生懸命に記録していたんです。そこからフロイトの精神分析が始まったのですが、その一つに「少年ハンス（5歳）」の記録があります。

ハンス少年は、妹ハンナが生まれた頃から不安が大きくなってしまふ。具体的には馬が怖くなくなってしまふんです。それでフロイトのところに相談に来ました。ハンスはいろいろ考えて、その記録は面白いのですが、ある時、「僕は卵を産んだことがある」と思いついた。

記録を読みます。「パパが卵を産んだのを知っているよ、ママがそう言ってたもの」、父親が「じゃあママに聞いてみようか」と言うと、「嘘だよ。でも僕は前に卵を産んだことがあるんだ。そしたらひよこが飛び出てきたんだ…卵の中から小さなハンスが出てきたんだ」。そう言って、少し落ち着くんです。フロイトによると、ハンスは、妹が生まれ、お母さんを取られてしまったように感じていたから、「誕生・出産・生まれてくる」ということが嫌だった。それに関連するすべてのことが嫌いだったし、また次にも「生まれてくる」のではないかと恐れていた。ところが、いろいろ考えているうちに、自分が「産んでしまふ」ことを思いついた。自分が産む側になれば、立場が変わる。それによって少し落ち着いたのではないかと理解しているのです。

もう一人、5歳半の少年フリッツの言葉を紹介します。やはり精神分析のメラニー・クラインという先生の報告です。フリッツ少年は、繰り返し「生まれる前、僕はいったいどこにいたの」と質問しました。お兄ちゃんに聞いてもお父さんに聞いても答えてくれない。そこで、誰のところに行っても、「生まれる前、僕はどこにいたの」と聞く。なぜそうなったか。彼にはお兄さんとお姉さんがいるのですが、ある時、昔の話をしていた時に、「あのとき、おまえはまだ生まれていなかった」と言われた。そのことがきっかけだったのだそうです。きっと彼は悔しかったんですね、自分だけ「まだいなかった」と言われたことが。「まだいなかった」、じゃあ「どこにいたのか」、彼はそう考えたわけです。「まだいなかった」というなら、「生まれる前、僕はどこにいたのか」。この問いが、実は深い意味を持っていることを、後になって見たいと思います。

その代わりに、今は、この二人の少年、ハンスとフリッツの違いに注目します。ハンスは、「妹の誕生の不思議」を感じました。だから「赤ちゃんはどこから来るのか」と考えたわけです。それに対してフリッツは、「自分の誕生の不思議」に直面しています。「僕」はどこから来たのか。この二つの問い、少し違うでしょう。実は、この違いは決定的なんです。「赤ちゃんはどこから来るのか」という問いと、「僕はどこから来たのか」という問いの違い。同じ「誕生」の不思議なのですが、決定的に違う。そして、この「自分の誕生の不思議」について考え続けてしまふ人がい

ます。どうしてそんなことが気になるのか、不思議に思われるかもしれませんが、今から少しずつ話をしてゆきます。

自分が生まれてこないこともありえた

「自分が生まれてこないこともありえた」という感覚が、学生たちの報告に時々出てきます。例えば、「自分が生まれてこなかった家の様子を思い浮かべたりすることがありました」という報告。お父さんとお母さんとお兄さんがテーブルで話をしている、自分は生まれてこなかったけれども、うちはこういうふうになっているんだな、と思い浮かべていたというのです。僕自身、子どもの頃、ぼんやりと、そんなことを何度も感じていました。僕が生まれて来なくてもパパとママはいただろうなという、そんな不思議な感覚。もしかしたら共有してもらえるかもしれませんね。

ある人は、「自分がいなくても世界が今と何も変わらずに回っている」と考えたとも言います。さみしいわけでもない、悲しいわけでもない。ただそう感じていたというのです。

学生たちの中には、夭折した兄弟のことを報告してくれる人もいます。本当は自分の上にお兄さんがいた、お姉さんがいた。でも早くに亡くなってしまった。「仏壇の上に赤ん坊の写真がある。自分が生まれたときにはすでに亡くなっていたお姉さんだと聞いている。でもその彼女が自分の姉であることがうまく飲み込めなかった」と言うのです。

さらに、「私を育ててくれた父親は実の父ではありません。父は私が誕生して間もなく死んだため、母は再婚しました」という学生もいました。ご存知の通り、こうした話の特別なケースとして、「生殖補助技術によって生まれてきた子どもたち」がいます。想像してみてください、お前は「人工授精」で誕生した、お父さんは実の父（遺伝子上の父親）ではないと、人生のあるとき突然、知らされる場面。僕が話を聴かせてもらったある方は、30歳を過ぎた頃に母親から「人工授精」で生まれてきたことを聞かされました。それがどんなに大きなショックだったか。「人工授精」の場合、お父さんが誰であるかはわからないんですね。

「根っこにあるもの」、「その上に自分の経験が積み重なってきた土台」が壊れてしまった。「生きてきた人生を失うことになる」、「意味がなくなる」。その方は喘息を持っていたのですが、お医者さんから「ご家族に喘息の方がいますか」と聞かれると、それに回答することができない。自分の父親がわからない、教えてもらえない。教えてもらえないのではなくて、本当に特定できない。「人工授精」は父親が誰かわからないようにするんです。自分がそうやって生まれてきたということとを大人になって聞いたときに、どれほどショックを受けるか。

こういう話、実は、源氏物語にも出てくるんですよ。14歳の冷泉帝は、本当の父親が桐壺帝ではなく光源氏であると聞かされる。別の場面では、薫が、柏木が実の父親であったと知る。それがどれほど深い体験であったか、紫式部は書いているのです。

というわけで、「誕生の問い」といっても様々です。「お父さんとお母さんの仲がいいとうまれるのよ」という「生殖や性の位相」で理解すれば、それはある程度、科学的に解明されています。でも、「自分はなぜ生きているのか、自分はどのようにしてここにいるのか」という問いと結びつけて考

えてしまう人もいます。いくら考えても答えがないことは分かっている、どうしても気になり、考え続けてしまう人もいます。もしわかりにくかったら、世の中にはこんな人もいますんだな、と思って聞いて下さい。

2. 「生まれてきてよかった」と「生まれてこない方がよかった」

さて、これから「生まれてきてよかった(感謝)」とを感じる人と、「生まれてこない方がよかった(未生怨)」とを感じる人との違いについてお話します。

なぜ私を生んだのか

「子どもの頃、母親に、なぜ僕を生んだのかと責めて困らせたことがありました」と書いてくれた学生がいます。なぜ僕を生んだのか、と。このときの彼は、「産まなければよかったのに」というわけではなくて、ただ純粹に、理由を知りたかったのだそうです。でも、これがもう少し辛い話になると、「本当は私は生まれてこなかった方が良かったのか。本当はそう思っているのではないか」という疑問になります。そしてその疑いが心の中から消えない。親からいじめられているわけではない、優しく育ててもらえた、ありがたいのだけど、でも心の底のどこかで、「本当は私なんかいない方が良かったんじゃないの」と、その疑問を持ち続けている子どももいるのです。

そうした子どもたちと接する場合に、この疑問のことをまるで知らずにその子に接するのと、こういうことを気にしている人がいると知って接するのとでは違いますね。ですから、ぜひ、こういう疑いを感じ続けてしまう子どももいるのだなと思って、話をきいて下さい。

「なぜ私を生んだのか」、「生まれてこない方が良かった」。こうした疑問や疑念を「未生怨」と言います。むずかしい言葉ですが、生まれてくる前から始まっている恨みのことです。育て方を恨むのではない、自分を存在させたことに対する恨み。生まれなくなかった、生まれてこない方が良かった。「阿闍世(アジャセ)コンプレックス」(古沢平作／親鸞『教行信証』、仏典『涅槃經』『観無量寿教』)という話も、ここに関連しますが、今は省略します。むしろ、ある養護施設で暮らしていた中学1年生の少年の言葉を紹介したいと思います。少し長いですけど、読みます。

「僕がこの学園にきたのは確か11年前の2歳のときだ。理由は全然知らないけれども、やっぱり父が母を捨てたんだと思う。僕は生まれてこない方が良かった。父は病気で死んだ。母は僕を捨ててどこかに逃げた。なぜ逃げたのか知らないが、捨てるくらいなら子どもを産まない方がいい。僕に両親がいると知ったときは嬉しかったが、でもやはりこの方がいい。やはりここに来てから11年になるから、ここの生活に慣れ、普通の家庭の生活が何だかだらしなく感じる。どうせなら僕は生まれなくなかった」。

「どうせなら僕は生まれなくなかった」というのです。ニーチェという哲学者、聞いたことありませんか。彼によれば、「最も善いことは、お前にはまったく手が届かないこと、つまり、生まれないこと、存在しないこと、無であること。次に善いのは、早く死ぬことだ」(『悲劇の誕生』)。最も良いのは「生まれないこと」、でも生まれてきたからには「早く死ぬこと」がいい。ずいぶん

冷めた言い方です。でも、人間の歴史の中には、こんなふうに考えた人がたくさんいます。生きていくことは楽ではない、本当に辛い、そう感じている人は本当にたくさんいるのです。

ところで、このように考えてみると、「待ち望まれて生まれてきた子」と「望まれずに生まれてきた子」とでは、その人生がずいぶん違ってくることになります。望まれずに生まれてきた子は、気がついた時には、そうした親の下に生まれてきていたのです。自分ではどうすることもできません。生まれてきたのに、「望んでいなかった」と言われても、その子には、どうすることもできないのです。

たとえば、サルバドール・ダリ、バルザック、坂口安吾といった芸術家たちは、「望まれずに生まれてきた子」でした。彼らの伝記を読むと、その人生を通じてどこかで、自分は生まれてきたくなかったのに、と感じていたようです。でも、ある意味ではそれが芸術的な創造へのモチベーションにもなっていました。ここにおられる多くの方は、「待ち望まれて生まれてきた」方々だと思います。その誕生をお父さんやお母さんが喜んだ。でも、なかには、望まれずに生まれてきた子もいる。そして、不思議なことに、その子たちは早い時期からこのことを感じ取っています。子どもだからわからない、と大人は思うのですが、子どもたちは敏感です。むしろ、それは皆さんご存知ですね。

生まれてきてよかった

ところで、「生まれてきてよかった」という感想も、もちろん、たくさんあります。誕生への感謝です。この点について、ハンナ・アレントという哲学者が、面白いことを書いています。「一人の赤ん坊が“この世界にうまれてくる”という小さな出来事が、人間の自由を証明する」。赤ちゃんの誕生は、人間が自由であることを伝える、新しいことを始めてよいということの証明であるというのです。

同じことを、インドの詩人タゴールはこんなふうに言いました。「すべての赤ちゃんは、神がまだ人間に絶望していない、というメッセージを持って生まれて来る」(詩集『迷える小鳥』)。赤ちゃんが生まれて来るということは、まだ神様が人間に絶望していないことの証拠である。「まだいいよ、まだ人間が存在していいよ」と言ってくれている証拠。とすれば、赤ちゃんが生まれて来ることは本当にありがたいこと、本当に嬉しいことと見るわけです。

そうした、いのちを与えられたことへの感謝、生まれてきたことへの感謝を、ある少年は、「僕がうまれてきたわけ」というタイトルでこんな風には書いています。

「ねえ、おかあさん、ぼくがなんで生まれてきたかわかる？ 早くおかあさんに会いたかったんだよ 生まれてきて良かったあほんとに会いたかったんだよ」。小学校2年生のときだそ

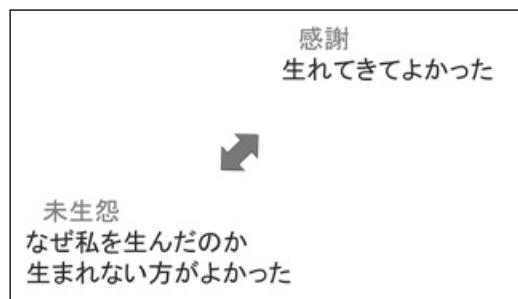


図1

うです。

さて、二つの方向を見ました。「生まれてきてよかった」という人と、「なぜ僕を生んだのか、生まれてきたくなかった」という人。(図1)

おそらく僕たちはこの両方を持っているのだと思います。あるときには「未生怨」の方が多い、あるときには「感謝」の方が多い。

(図2)

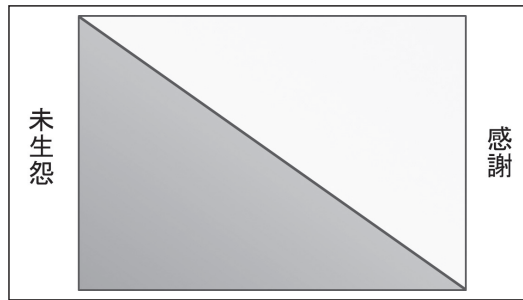


図2

気がついた時には、いた

でも、感謝とか未生怨と言われてもわからない、とにかく、気が付いたら、私はいたんです、そこが出発点です、という人もいます。本当にその通りです。

なぜかわかんないけど、僕らはみんな、生まれてきた。少し難しい言葉でいえば、「存在しないこともありえたはずなのに、気がついた時には、既に、この自分として、生きていた」。「存在しない、生まれてこない」こともありえたのに、気がついたときには、「この自分」として生きていた。そこに気が付く、この感覚。

選んできたわけじゃない。とはいえ、実はこの点は微妙なのです。学生によっては「自分でこの親を選んでここに来た」と感じている人もいますからです。でも、多くの人は自分で選んだのではなくて、気が付いたときには、この体の中にいた、この家の子どもだった。

ハイデガーという哲学者は、その事実を「被投性 Geworfenheit」と呼びました。「投げ込まれている」と言うわけです。さらに、「非存在の可能性 das Nichtseinkönnen」という難しい言葉も使うのですが、その話は飛ばすことにします。

その代わり、同じく哲学の九鬼周造という先生の言葉を見ます。九鬼は、「あることもでき、ないこともできる」(偶然性)という言い方をします。僕らはどういうわけか生まれてきた。「存在しないこともありえたはずなのに、既に、この自分として、生きている」という感覚。九鬼は、「偶然を運命とする」という不思議な言い方もします。生まれてきたのは偶然なのだけど、それを運命として引き受ける。引き受け直そうとする。

そして、ややこしいのですが、「意志が引き返して意志する」という不思議な言い方をします。「意志しないこともできたのだから」とは、引き受けずに通り過ぎることもできたのだけど、でも、わざわざ引き返してきて、「自分に与えられたこの人生を自分の運命として生きていこうとする」、そして、「それが救いをもたらす」と言うのです。

先程の図2、「理念としての未生怨」と「理念としての感謝・自由」の両方を、僕らは持っていると思います。言い換えれば、「生まれてきたくなかなかかった」と、「生まれてきてありがたい」という両端の中間のどこかに、僕らはいるのだと思います。だからこそ、「偶然を運命として引き受けようとする」という感覚が生じてくるのだと思います。

より正確には、偶然を運命として引き受けたいと思うが、なかなかそれができない。覚悟を決めて受け止めることができず、逃げ腰になってしまうのが、僕らの普通の姿なのだと思います。

3. 生まれてこなかった子どもの「声」

さて、ややこしい話をいろいろしてきましたが、実は、ここまではすべて「生まれてきた子ども」側からの話でした。ところが、「生まれてこなかった子ども」について書かれた本があるのです。不思議ですが、「生まれてこなかった子ども」の視線で書かれた本。

まず、ある学生が書いてくれた報告を紹介します。「…私はある時期、自分には生まれないことを選ぶ可能性があったのに、その道を選ばなかったということを、繰り返し考えていました」。

何となく分かりますか、この感覚。お母さんのおなかの中で、「生まれないことを選ぶ可能性」があったのに、結局、自分はその道を選ばなかった、だから生まれてきた。そんなことを繰り返し考えていたと言うのです。

実は、同じことを、芥川龍之介が『河童』という小説の中で書いています。河童の世界では、お母さんのおなかが大きくなると、お父さんが、おなかの中の赤ちゃんに尋ねます。「お前は这个世界へ生まれてくるかどうか、よく考へた上で返事をしろ。外に出てきたら大変な目に遭うぞ、つらいこと、苦しいこと、たくさんあるぞ」。その小説の河童の赤ちゃんは小さな声で返事をします。「僕は生まれたくはありません」。そしてこの河童の赤ちゃんは生まれてこなかった、という話です。

興味深いことに、そうした話を、克明に描き出した本があります。イタリアの女性ジャーナリストの手になる貴重な本（『生まれなかった子への手紙』）。彼女自身の体験を基にした告白的ドキュメントです。ジャーナリストとして活躍し始めた矢先に、予期せぬ妊娠をします。そのおなかの中の赤ちゃんとの対話なのです。

「私はおまえを待ちわびていたけど、受け入れる準備はできていなかった。私はいつも残酷な問いを突き付けられていた。もしおまえが生まれてくることを望まないとしたら」。

「もしある日、おまえがこう叫んで、私を非難したとしたら。誰が僕をこの世の中へだしてくれと頼んだのさ、なぜ僕を生んだのさ、なぜ」、そうした言葉を恐れていたというのです。

「おまえが再び沈黙の中に戻りたいと思っていないなどと、どうして私に言うことができるだろうか」。

実は、彼女のお母さんは子どもを望んでいなくて、薬を飲み続けていたのだそうです。ところが、ある晩、おなかの中の赤ちゃんが「蹴る」という仕方で「生きたい」というサインを送ってきたから、母親は薬の服用をやめた。そして彼女が生まれてきた。だから母親によれば、彼女（ファラーチ）は「自ら生きる意思を表示して生まれてきた」というのです。

初めの内、ファラーチは、おなかの赤ちゃんに、生まれてくるのは良いことだと語りかけていました。むしろそれを一生懸命に伝える仕方で、自分自身に言い聞かせていたようです。しかし同時に不安があり、おそれがあり、疑いもあった。その混乱した日々が語られます。

ところが、過酷な取材旅行を強行するなかで、とうとう流産してしまいます。そして気を失ったなかで夢を見る。この本はその夢がクライマックスなのです。それは法廷で裁かれる夢でした。子どもを死なせた罪に問われ、被告席に立つ夢。「生まれてこなかった子ども」が証言台に立って語るのです。

「僕は生まれることを望みませんでした。初めのうちは、生まれることは美しいと感じていました。お母さんが僕にそう教えた。生まれることは美しく、無から抜け出すことは喜びだ。無より悪いものはなく、最悪なのは、存在しなかったと言わねばならぬこと。お母さんの信仰が僕を引き付け、お母さんのプレポテンツァが僕を引き付けました」。彼は、というのは、それが男性の声であり、しかも成人の声であったとファラーチは書いています。

「ところが、ある時期からお母さんは僕に向かって、おまえは本当に生まれてきたいのかと問うようになりました。自分の不安から逃れるために、生まれるかどうかの決断を僕に押し付けました。僕に試練を与えたのです。お母さんは自分が苦勞して暮らしているのに、子どもにも同じ苦勞を体験させてしまうという、その不安に耐えきれなくなったのでしょう。そのことに気付いたとき、僕は最初で最後の選択を自分自身に許しました。生まれてゆかないこと。生まれることを拒否すること、そして二度と望みを持たないこと」。

そして最後にこの「声（生まれてこなかった子どもの声）」はこんなふうに問いかけます。

「もし人生が苦しむことであるなら、一体何のために生まれるのですか。胎児たちの目的ははっきりしています。生まれること。存在すること。ではお母さんたちの世界では何が目的のですか。死ぬことですか。無を待つことですか。もし無に向かっているのなら、なぜ無に還るために、無から出てゆかなければならないのか、僕にはわかりません」。

そして夢が終わるのです。

これは夢です。ひとりの女性の夢なのですが、しかしそこにはたくさんの大切なことが描かれているように思われます。とりわけ、今考えてみたいのは、「生まれてこない道があった」という点です。図のように(後述)、分かれ道があった。選択する分岐点があった。僕らは、右に進んだから生まれてきた、そして、ここにいる。でも、生まれてこない、左に進む道もあった。あるいは、その道を選び、そのまま生まれることのなかった子どもたちもいた。ここで僕らは、「生まれることのなかった子どもたち」の存在に気がつくことになるわけです。

ここで一度、止まります。皆さん、お隣さんとしゃべってみてください。今までずいぶん重い話をしましたから、お隣さんと、ちょっと話を。二人でも三人でもいいですから、今までの話を聞いて何を思ったか。2、3分、どうぞ。

〔フロアの皆さんは、最初ぎこちなく、しかし徐々に賑やかに、それぞれ思ったことを伝えあっていた。なお、こうしたペアトークの後に、シェアする時間は設けない。それでは単なるおしゃべりに終わりはしないか、約二十年間、迷い続けたが、数年前からその不安がなくなった。単なる一休みではない。参加者が一度立ち止まり、自分の問題と

して捉え直すために必要な機会。あるいは、たとえ単なるおしゃべりに終わったとしても、講義や講演の間にこうしたペアトークの時間を挟むことには意味があると考えようになってきたのである。]

埴谷雄高『死霊』

では、再開します。前の方々の話を聴かせてもらいましたが、「ふつう聞かない話」とか、「今まで考えたことがなかった話」ということでした。本当にそう思います。こういうことを考えることはめったにないし、ましてそれをずっと考え続けることなどないと思います。でも、考えてしまう人がいるんです。今からお話する一人の小説家、埴谷雄高という人はこんなふうに考えました。『死霊』という本です。苦しくなる話ですが、聞いてください。

「ひとつの生は殺戮の上に成り立つ」と、埴谷さんは言います。例えば、受精という出来事を考えてみれば、精子が4億、5億ある中で、一つだけが勝ち残るわけです。他の可能性は全部消えてしまう。

「お前がようやくお前自身としてそこにあるのは、4億、5億にのぼるお前自身の兄弟殺しのすさまじい結果の上にのみ成り立っている」。

どういうことかという、何かが「存在する」ということは、何かを「存在させない」ということだ、というのです。

「それがそこに存在するという単純な理由だけで、未出現の何かの出現の決定的な障害になってしまう」

「そこに何かが存在することは、怖いことに、もはや決定的に何かを存在させないことにはならない」（『埴谷雄高全集・第十巻』）。

たとえば、受験を考えてみます。あなたがこの大学に入学したということは、誰かが落ちたということになる。同じように、あなたがここに存在するのは、実は何か、誰かを存在させないことになっている、何かを押しのかけたということなんだ。その点を埴谷さんは徹底して見つめ続けるのです。

絵を見てください(図3)。真ん中の座っている人だけ見れば、気持ち良く座っているだけに見えますが、実は、そのまわりに、座れなかった人がたくさんいます。誰かが座るということは、他の人を坐らせないということである。自分では押しのかけたつもりはなくても、実は、他の人を押しのかけることによって、初めて座ることが可能になる。誰かを押しのかけて初めてそこにいることができる。その点を見つめ続けてゆくわけです。



図3

「他の者がここに在り得たかもしれない可能性を踏み潰して初めて、自分がここに存在する」。したがって、「別の何かを『存在させない』ことから免れることはできない」と言うわけです。

何かが『存在する、出現する』ことは、何かを『存在させない、出現させない』ことである。これに近いことを、ある学生が書いてくれたことがありました。お母さんが流産したことがあったという話を聞いたときのことです。お母さんから、「もしあのとき、流産していなければ、あなたは生まれていないわよ」と言われたというのです。

「その子がいなかったから、私が来た、弟が生まれてきた。そう思うと私はその子の死をあまり悲しいと思えない」。その子が生まれなかったおかげで、私は生まれてきたというのです。

他の可能性が「出現しなかった」おかげで、自分が存在する。それは埴谷さんによれば何ら特殊なことではありません。すべての人が他の可能性を奪って初めて存在する。自分がここに存在しているのは、他の可能性を壊した結果である。「無数の他の可能性の排除」の上に成り立つ。そういうのです。

先ほど、「気づいた時には、もう、いた」と言いました。でも、この「いた」というのは、実は、来ることがなかった多くの人たちの代わりに、その人たちを押しつけて、初めて可能になったということなのです。

埴谷さんの使う「未出現」という言葉は、今の話でいえば、まさに「生まれてこなかった子どもたち」のことです。そして「未出現の蟠り（わだかまり）」とは、「生まれてこなかった無数の子どもたちの声」ということになる。その「声にならない声」に耳を傾ける感性、それを大切にしたいと思うのです。

生まれてくることが、よいことなのか

ところが、実は、ここまでの話には、ある前提がありました。生まれてくることは良いことという前提です。逆に、生まれてこないことは残念である、抑圧された可哀想なことである、本当は生まれてきたいのだけど、生まれてくることができなかった、可哀想に、という前提です。

でも、本当にそうなのでしょうか。本当に、生まれることだけが「よい」ことなのか。もしかすると、生まれる方がよいとは限らないのではないか。少なくとも、どちらがよいとは言えないという地平を考えることができます。

先ほど見たように、「生まれるか、生まれないか、その分岐点」があった。ということは、その分岐点の「前」を想像してみることができます。想像しにくいですが、「生まれてきた子どももいないし、生まれなかった子どももいない」という時点。

何を言っているのか、訳がわからないとお感じになるかもしれませんが、哲学という学問は、こういうところから考え直そうとします。もしくは、そういうところに触れようとする。

図を見て下さい(次頁)(図4)。僕らはこの「生まれてきた」ところを生きています。そこで、昔を思い出し、さかのぼっていけば、お母さんのおなかの中にいた、「生まれる前」があったと確認します。そしてやはり「生まれてきた」所から考えますから、もはや「生まれてこない」道は

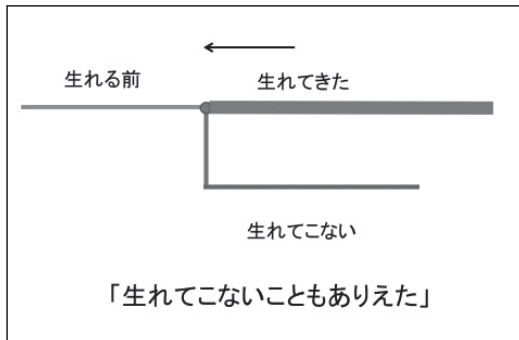


図4

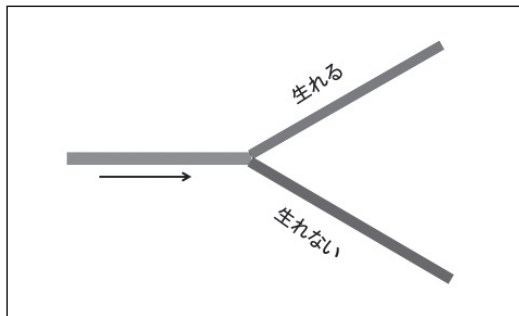


図5

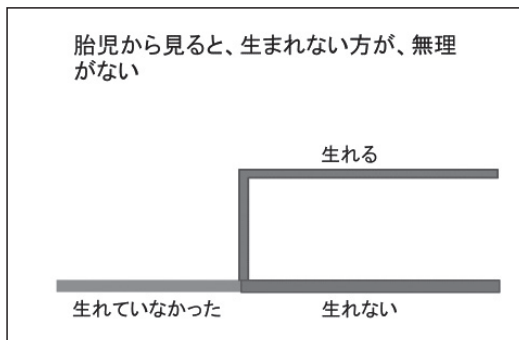


図6

ありえないと考えます。

ところが、胎児の視点から見れば、「生まれる」か「生まれないか」、二つに一つ、どちらも同じ可能性として、分岐点に立つわけです(図5)。先ほどの、夢の中で法廷に立った子どもは、その分岐点において、生まれないことを選びました。生まれることもできる、生まれないこともできる、その分岐点に立って、自分は生まれないことにしたと語ったわけですから。

ところが、もう少し丁寧に見てゆくと、胎児にとっては「生まれてくる」方が特別なのです。そのまま「生まれない」方が無理がない(図6)。「生まれる」ということは、重いものを持ち上げる時のように、無理して持ち上げる、あるいは、遠くに投げるように、無理をする。生まれてくる方が、あたかも重力に反する仕方で、特別なのです。

その上で、法廷の証言台に立った子どもは、私たちに問いかけました。胎児の世界では目的がはっきりしていた、生まれてゆくこと。では、生まれてきた、既に生きている人たちは、いったい何を目標にしているのか。この問いの前に、僕は連れ出されてしまうことになるわけです。

子どもたちが触れている不思議

今日は、「誕生」の不思議について考えてきました。「誕生の問い」という小さな不思議の中には、ずいぶん深い問いが含まれていたことになります。

子どもたちはこの不思議を感じています。そして思いもよらぬ時に、思いがけない言葉を大人にぶつけます。「生まれる前、僕はどこにいたの」。「赤ちゃんはどこから来るの」。

突然どうしたの、うちの子、変じゃない。そうお感じになられたら、ぜひ、思い出してください。子どもたちは、大人よりよほど、無防備のまま、不思議に触れてしまうのです。そして、おそらく僕は、そうした感覚を麻痺させ、鈍感になることによって、大人の仲間入りをしてきたのです。

ですから、どうぞ、子どもたちの言葉に立ち止まってください。そしてその言葉の裏側にどん

な不思議があるのか、ご自分の子どもの頃を思い出してください。そして、もし、そうした不思議の背後に、実は、とても深い問題が潜んでいることを思い出して下さったら、今日の話は大成です。

僕の話はここまでです。ありがとうございました。

一色：西平先生、どうもありがとうございました。非常にむずかしい、難問か、または皆さんの小さい頃のことを思い出して、西平先生がお話されたことが頭の中にずっと入って来たのか。いかがでしょうか。哲学というのは人が生きる、死ぬことの一番深いところではないかなと私は思いました。

それではパネリストとして白川先生、お願いします。

白川：本当に根本的な、生きることと死ぬことについてのお話でした。私はご存知のように幼児教育学が専門です。今回、西平先生からあらかじめレジメをいただいておりますので、先生の本を悪戦苦闘しながら読ませていただきました。6、7割くらいわかったかなあという感じです。私は幼児教育学の、少し違う角度からお話したいと思います。

まず、西平先生のレジメの1「子どもの頃、誕生について不思議を感じたことはなかったか」についてです。私は子どもの頃、自分の誕生について不思議を感じたことはありませんでしたが、「生と死」については、不思議を感じたことがあります。私は満州の大連で生まれました。2、3歳まではとても豊かな生活でした。大きなレンガ造りの家に住んでいました。そのとき、もう戦争が始まっていて、父親が戦地から一度大連の家に帰宅したとき、大きなチーズの塊、今でも売っていますが、赤い包みに覆われたチーズを土産に買って来ました。居間のテーブルの上にチーズを置いて「おーい子どもたち、これは鬼の卵だ。今から三つ数えると赤鬼が生まれてくる」と言ったんですね。それがすごく記憶に残っているんです。きょうだいが多かったんですけど、みんな、父親が数えている間に2階へウワーッと逃げたんです。私は階段の途中のトイレに隠れたのを覚えています(笑)。とにかく鬼が生まれるのではないかと、みんな思ったんですね。3歳くらいまで、裏庭には花が咲き乱れ、表はアカシアの並木が連なる、そんな豊かな環境だったのです。

それが戦争に翻弄され、4歳のとき、日本へ引き揚げて来ました。大きな貨物船に大勢の日本人が乗って帰って来たのですが、船では家族ごと船室の小さく仕切られた場所で過ごしていて、昨日までそこに居た子どもが今日はどうも亡くなったらしい、そしてコモカ何かに包まれて海に投げ入れられた、そういうこともちらっと耳にしていました。お葬式なんてないんです。長い旅の後、貨物船が日本に近づき、甲板でひしめく大人たちの隙間から、小さな緑の島、日本を初めて見たのです。私は4歳の頃から自分にはどうも根っこがないと感じていました。どこにも所属しない。その後、父親の田舎の長野県の寒いところに疎開しましたが、私は栄養失調で寝たきりでした。戦地から帰った父親が医者連れてきて、私の枕元で「ここに置いておいたら、もう長くは持たない、死ぬだろう」とひそひそ話していました。私はこの情景をずーっと覚えていまし

たね。でも、そのとき、死について考えたことはありませんでした。早く元気になって動きたいと、それしか考えていなかった。でも、その後、ずーっと体が弱く、中学生になる頃から1年に2回、必ず恐怖に襲われるんです。それが何なのか、自分ではよく解らなかったですけれども。暗い、底なしの井戸の奥へと落ちていくような…、ああ、また来る来る来る…と思ったら動けないくらいに不安に襲われる状況がありました。それが幼児期の経験とどう関係があるのか解りません。ただの思春期だったのかもしれないけれども、思春期にしてはひどすぎるなと思っています。

次に、「誕生」とは、母親の胎内からこの世に生まれた時点を言うのですが、私には、誕生の前から子どもはすでに「心」をもっているように思われます。

子どもは1歳頃から「言葉」を使い始めます。皆さん、メアリー・ポピンズの双子の赤ちゃんの話、知っていますか。男の子と女の子がいる家庭にメアリー・ポピンズが家政婦さんとしてやってきます。その家には双子の赤ちゃんもいるんです。その子たちは生まれてきて本当に幸せで、朝、寝ている子ども部屋にお日さまが差し込んでくると、その子どもたちはお日さまの光と会話をします。窓辺に来る小鳥たちとも会話する。ところがある日、歯が生えてきて1歳の誕生日を迎えます。そのとたんにお日さまとも小鳥とも会話できなくなってしまう。それで双子の赤ちゃんが大泣きするんですね。メアリー・ポピンズにはこうしたおもしろい話がいっぱいあります。ある日、兄弟が親戚の家を訪ねたら、食卓で食事している様子なのに誰もいない。で上から声があるので見上げたら、おじさんお婆さん、みんなイスごと浮き上がって天井に近いところで食事をしている。心が楽しくなると浮き上がってしまう。そんなおもしろい話もあります。

さて、私は今、「さんさん広場」というのに「子育てアドバイザー」として参加しています。芦屋市立岩園幼稚園で、3歳の子どもを対象に親子で1週間に1回、来てもらい、広い園庭や遊戯室で親子で遊んでもらったりしています。一緒に来られるのはお母さんが多いです。多いときは22組ぐらい。だいたいメンバーは決まってきています。メンバーの中には、5、6組の親子が、0～2歳の弟や妹も連れて参加します。赤ちゃんを抱いて3歳の子を連れてくるのです。私は今まで幼児教育学で、言葉の発達、身体能力の発達、感覚器官の発達、幼児教育学の歴史などについて科学的、理論的に学び、学生にも教えて来ました。一方では、心を育てる、心の教育と言われるようになったけれども、心のことをよく解っていない。「心ってどこにあるの？胸の中？」とか、「頭の中ではなさそうだし」とか。解らないことがいっぱいありますね。

この「さんさん広場」をやっていて気が付いたのは、3歳で「私」という自我が成立する前に、すでに「心」を持っている。別の言い方をすれば「魂」と言ってもいいかもしれません。あるとき、部屋で親子で何か制作していて私も3歳児と一緒に活動していたのですが、顔に強い視線を感じてパッと見たら、お母さんが抱っこしている5カ月ぐらいの赤ちゃんがじーっと見ていたんです。私もその子を見たら、ニコッと笑うんですよ。そういう出会いがたくさんあって、「この子はもう心を持っていて私に働きかけているな」と今までにない、感じを得ました。砂場で遊んでいるとき、初対面の1歳児が向こうから交信してきたこともありました。

西平先生のレジメの2「赤ちゃんはどこから来ると思っていたか」について

西平先生のお話を伺って、思ったのは男の子と女の子の違いがあるのではないかということです。学生の皆さんにお聞きしたいのですが、女の子は「赤ちゃんはどこから来るか」って思ったことあるのかな。女の子は「いつか自分の胎内に赤ちゃんを宿すことを予感している」のではないのでしょうか。たとえば月経、生理が来たとき。昔は排卵と言っていて、卵を出しているんだと教えられました。いずれこの卵の一つが赤ちゃんになるのかな、それは自分のおなかに宿るのかなとかね。それが男の子の「赤ちゃんはどこから来るの?」とは違うのではないかなと思いました。

私は女って2度生まれるような気がするんです。1度目は自分が産まれたとき。そして子どもを産んだ女性って、何かこう生まれ変わったみたいなんですよ。「え、同じ人?」っていうくらいに。よく「母は強し」と言いますが、何かこう生まれ直しているような感じがします。そこが男性と女性の違いなのかなと、解らないなりに思っています。

次に、西平先生の2、『生まれてきてよかった』（感謝）と「生まれてこない方がよかった」（未生怨）』についてですが、私自身は「なんで産んだの?」と母親を責めたことが一度あります。21歳の頃です。時代も違うので、こんなことを蒸し返すのは恥ずかしいことなのですが、そのときの母親の反応がすごかったんですね。私のきょうだいはわりと歳が近くて、上から女、男、その下は女、女、女、女だったのです(笑)。あるとき、父親だったか母親だったかが「本当は男の子が欲しかったので男の子が生まれるまでと、産み続けた」と言ったんですね。私が21歳の頃、大学を卒業して就職か結婚かで自立したいと思ったのですが、就職がまるでなかったのです。求人票が大学にたくさん張り出されていて、そこを回ったら「え!?!、女子学生がいるんですか? うちの女子学生はいりません」と言われて、ことごとく駄目だったのです。そういう時代だったのです。それで自分が女であることと、卒業してどうやって生きていけるのかということで、母親に「なんで産んだのよ!」と言っちゃいました。そしたら、母親が真っ青になってブルブルふるえながらバシッと私の頬を打ちました。私は返す言葉がなくて…。あの場面だけは忘れられません。母親はお茶の水女子大学の前身の女子高等師範学校を出ているんですね。学問にも興味があつた優秀な学生だったらいいんですよ。で、子どもを6人も産んだ母親だったのです。

西平先生のご本を読んで、「盤珪禪師」のところがよく解りました。生まれて来た人は特殊で、その背後に「不生」があるのですね。実際に生まれてこなかったという「不生」と、これからも生まれてこない可能性のある「不生」。私のレジメの「不生」の右図は、僭越ながら西平先生の図を私なりに少し変えてみたんです。私たちは今、現世、この世に生きています。それから将来やって来る世代がいます。そして、私もまもなくこちらに入っていきますけれども、死者がいる。その周りには、生まれてこなかった者、そして生まれる可能性がなかった者という「不生」がたくさんいるのだと思うのです。私はこれを宇宙として考えました。つまり、この世というのは本当に小さなもので、その背景に生まれてこなかった、また今後も生まれないかもしれないという「不

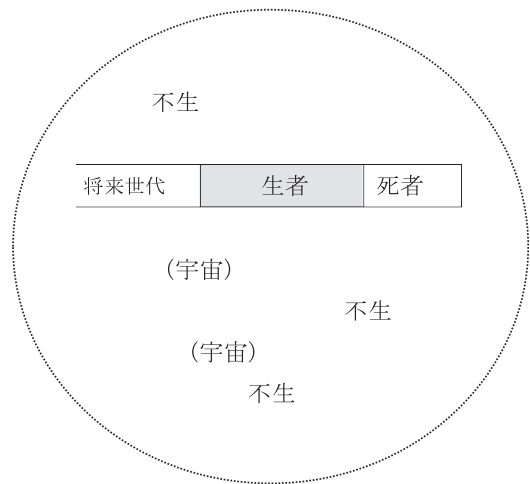
生」の地平が広がっている。私流に考えれば、「まだかたちを成していない生命」と「宇宙の塵となっている生命」と言っているのかなと。

そうしますと、私が幼児教育学で研究してきましたフレーベル、幼稚園（キンダーガルテン）の創設者の考えに通じるものが見えてきます。フレーベルが幼稚園を開いたのが1840年ですが、その前の1826年に『人間の教育』という本を出しています。その冒頭で、「すべてのものの中に永遠の法則が宿り、働き、かつ支配をしている」と述べ、教育と

はこの「永遠の法則」あるいは「生命の法則」に気づかせることだとしています。このあと長々と書かれているのですが、このことが、フレーベルが、後に幼い子どもたちを集めて遊んでいることとなかなか結び付かないと思っていたのです。まだかたちを成していない生命があって、その法則が現に生きている人の中にも、自然の中にも働いていると理解できたような気がしました。そういう中で、私たちは現世の、この世の子どもたちを教育をするのだと思いました。科学は身体運動の発達、認知機能、脳の働きなど、明らかにしてきましたが、ずっと一貫して在りつづける「命」、まだかたちを成していない「命」、この世を離れた「命」、「不生」については、あまり意識されていません。学生の皆さんが幼稚園や小学校の先生、保育士さんになったら、そういうことに気づく機会があるのではないのでしょうか。記録できなくても、みなさんの心に刻まれることと思います。

一色：白川先生、どうもありがとうございました。もう一人、軽部先生、コメントを一言いただけますでしょうか。

軽部：総合子ども学科の軽部勝一郎と申します。西平先生、白川先生、どうもありがとうございました。私は日本教育史を専攻しております。私事で恐縮なんですが、西平先生のお話を伺って子どもの頃のことを思い出しました。私は自分がどこから生まれて来たのかと考えたことはまったくなかったんですが、10歳くらいまで体調の悪いときなどに、夜寝ていると夢で起こされる経験がよくありました。その夢は言葉で表現するのがちょっとむずかしいんですが、ブラックホールのようなところに引き込まれていく、そして出てこれなくなってしまう、そんな夢だったんですね。今回、先生のお話を伺って、あらためてその夢の意味を考えてみたんです。自分では気づかなかったんですけど、それは死への恐怖だったのかなと。10歳を過ぎた頃からそんな夢を見なくなったんですが、それは大人になって死への恐怖を押し殺すことができるようになったの



かなと感じました。あらためて、死への恐怖というのは存在を抹殺される、剥奪される、そういうことへの恐怖なのかなと考えた次第です。先生が最後におっしゃってくださった「生まれてこなかった命」もあるんだ、そういう命のことも考えながら私たちは生きていくことが必要なんじゃないかということ、このことを自分なりに考えながら生きていくようにしたいと思います。

一色：では、最後に西平先生、一言お願いします。

西平：僕が何をお伝えしたかったかという、子どもの頃の実験、たとえば先程軽部先生がお話くださったような不思議な体験、おそらく現代の科学では解明のしようがないこと、それが宝物だということです。あまりに深すぎて、現代の科学ではわからないだけなのです。とても大切なことなんです。

答えを出すことが大切なのではなくて、そういう正解がない問いを大切に温めておくこと、その感覚をぜひ育てていただきたいと思います。とくに小さな子どもたちと関わる人は、そうした、柔らかいものを柔らかいままでおける感覚を持つか持たないかによって、全然違うのです。そんなこと簡単だと思いでしたら、それは違います。科学的な知識を勉強するためには努力が必要です。それと同じように、正解のない問いを心の中に保ち続けることも、やはりトレーニングする必要があります。ですから、ぜひ子どもたちの何気ない一言、あるいは、自分の中の何だかわかんないけど気になっていた夢であるとか、昔の思い出であるとか、ぜひ大切になさってください、それをお伝えしたかったんです。ありがとうございました。

一色：西平先生、白川先生、そして軽部先生、どうもありがとうございました。

〈第二部〉

一色：では、まず、西平先生が先程お話できなかった部分についてお話してください。

西平：レジメの第4節のところを少し聞いていただこうと思います。盤珪禅師の「不生(ふしょう)」という言葉です。

先程、「生まれるか生まれないかと分かれる以前」の話をしました。おそらく学生たちは何を言っているのかわからなかったと思うのですが、盤珪禅師は、その地平を「不生」というのです。「生まれず」ということです。鈴木大拙によると、この「不生」は「生死」と対をなしています。「不生」は、生きることとも死ぬこととも違う。「生まれてこない」ということ。奇妙な言い方ですが、生まれて死ぬ「いのち」と、生まれてこない「いのち」とは、全然地平が違うということです。

もう少し丁寧に見ます。まず一つ目、「不生」は「不死」とは違います。「不死」とは、死なないことですから、一度は生きていたということです。それに対して、「不生」はそもそも生まれて

こないのですから、死ぬこともない。二つ目、「不生」は「未生」とも違います。「未だ生まれず」ではない。「未だ生まれない」とは、この私がまだ生まれていないということであるのに対して、「不生」は、そもそもこの私が生じることがない。まだ生まれていないのではなくて、そのままずっと「生まれない」、つまり「私」が生じない、存在しないということです。

その地平を盤珪禅師は「生まれ持った仏心のまま」と言います。「不生」とは、「私（我心）」が生じることのない、生まれ持った仏心のままのことである。「私」が生じることのない、いわば波立つことのない静かな深海のような地平を「仏の心」と理解するわけです。その上で大切なのは、その「不生」が今、生きているあなたのうちに働いているという点です。もし、ユング心理学をご存知でしたら、そこで語られる「無意識エネルギー」と近いとご理解いただいてもよいかもしれません。

このあたり、話は微妙なのですが、例えば、7図のように、不生は「私」によって分断されないと理解することができると思います。

僕は、自分が存在している時間を特別に扱います。つまり、自分がまだ存在していなかった時間（未生）と、自分がもう存在しなくなる時間（死後）との間にはさまれた、特

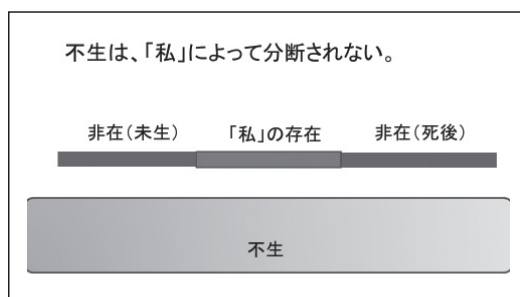


図7

別な時間。そこだけは「私」が生きている特別な時間として区切っているわけです。

言い換えれば、根底に静かに流れ続けている宇宙の流れを、「私」が生きている時期だけ特別にスポットライトを当て、特別扱いするものだから、それ以外の時間は暗闇のように感じてしまうわけです。それに対して、「不生」という言葉は、ある部分だけに光を当てないで、全体を見ようとする。そうすると、鮮明ではなく、全部がぼやっとなるかもしれないけれど、すべてが静かに流れていく地平が見えてくる。静かに流れ続けてゆく地平。

人間の「私」という自己意識は、あまりに特権的に「私」だけを優先してきたために、この「私」が、ますます鋭くとがってきました。それが人類の歴史です。それに対して、「不生」という言葉は、「私」だけを特権的にしない。心の最も底には、静かな流れがいつも変わらずある。生まれることも死ぬこともない、「生まれてこない」地平。その地平に耳を澄ませ、その流れを聴くように、盤珪禅師は私たちに語っていたわけです。

さて、そう理解してみると、「生まれる前、僕はどこにいたの」という、先のフリッツ君の質問は、実は、かなり深いところに触れていた可能性がある。禅の伝統には、「父母未生以前、本来面目」という言葉があります。あなたの父親も母親も未だ生まれる前、そのときの、本当の自分に出会ってこい、ということです。「私」に出会うのではありません。「私」などまるで存在していない地平、父も母もまだ生まれる前の、自分が生まれるか生まれまいか、そんなことは何も決まっていなかった、「生まれず」の地平、「不生」の地平、そこまで降りて行けとでもいうのだらうと思います。

もちろん、5歳のフリッツくんが、こんな厄介なことを考えていたわけではないと思います。

でも、その問い、「生まれる前、僕はどこにいたの」という問いは、そうした深みにつながる可能性を秘めていた。大人になると忘れてしまう、そうした広がりや深みの地平に、僕らを気付かせてくれる可能性があるのではないかと思います。

先程、白川先生が言及して下さった「フレーベルの宇宙エネルギー」と、この「不生」はかなり重なると思います。宇宙エネルギーとは、まさに生まれてこなかった者たちのエネルギーなのではないか。そのかすかな声に耳を傾ける、それが僕らに求められている。不生が今も働いている。生きている者たちの基盤として働いている。「宇宙エネルギー」が僕らの「いのち」の基盤として、今も働いているというわけです。

白川先生がこの図はよくわかるとおっしゃってくださいました(図8)。この「不生」の地平(①と②)から見ると、「生まれてくる」とはずいぶん特別なこと、ないしは無理してきたと言ってもいいかもしれません。ものを投げ上げるみたいに、無理して出てきた。とすれば、当然、戻っていくのは、この「不生」の地平である。「そのままずっと生まれない」という静かな地平。

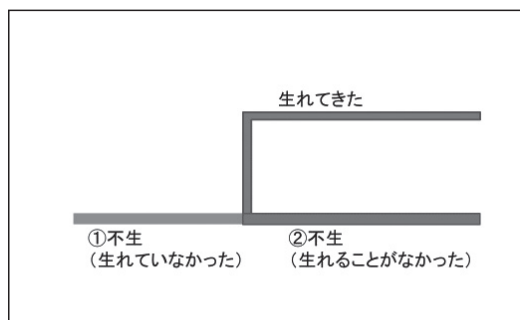


図8

先程、学生たちがいるときには、ここまで話をしませんでした。完全に子守歌になってしまうなと思ったので(笑)、やめたのですが、でも、本当は、この「不生が生の中で今も、はたらく」という点こそ、大切にしたいと思っていることなのです。「私」を生じさせることがない。あるいは、「生まれ持った仏心のまま」、あるいは、「生まれ持った透明な心のまま」と言ってもよいかもしれません。

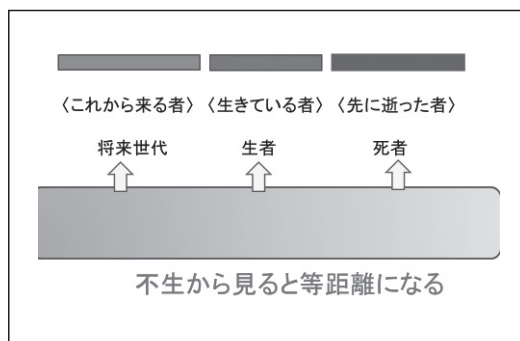


図9

最後に、少し、今までの話とは違う視点です(図9)。普通、「生きている者」と「死んだ者」は大きく区別されます。真ん中の「生きている者(生者)」と、右側の「先に逝った者(死者)」が全然違うという、当然のことです。他方、今度は、「これから来る者(将来世代)」も、今はまだいないのですから、「生きている者」とは区別されます。先ほど見た通り、「生きている者」だけが特別扱いされますから、「生きている者」は、「もう死んだ者」とも「まだ生まれていない将来世代」とも違うというわけです。

ところが、底流をなす「不生」は、それらのどれとも違います。あるいは、「不生」から見れば、

これらの三者は、どれも等距離になる。「生きている者」だけが特権的に偉いというわけではなくなるわけです。

そして、そこから見ると、実は、「生きている者」と「先に逝った者」は、案外近いことになります。「死者」も一度は「生きている者」でしたから、共通することが多いわけです。それに対して、「これから来る者」はもう少し、その存在が薄いことになります。来るかもしれないし、来ないかもしれない、漠然としています。ところが、「不生」ときたら、まったく「薄い」。ぼんやりしている。「ある」のか「ない」のか、分からないくらい、ぼんやりしています。

その「ぼんやりとした薄さ」に目を向けよと、盤瑠禅師は言うのです。明るい光の下で見ている限り、そんな「朧（おぼろ）」は見えません。しかし暗がりに目が慣れてくれば、少しずつ見えてきます。見えるというより、姿が感じられます、声が聴こえてきます。あるいは、昼の間も、星が輝いている、その見えない星に思いを留めよと言っているのかもしれない。

そうすることができれば、生きている者が威張らなくなる。生きている者だけが傲慢にならなくてすむ。その感覚を持るといいなと思っているのです。

私たちは皆、生まれてこない可能性があった。さしあたり、僕は、そこを原点にしています。僕らはみんな胎児だった。どんなに偉い人でも胎児であった。胎児ということは、流れてしまう可能性もあったし、中絶される危険もあった。「生まれてこない」可能性があったわけです。そこを出発点にしたい。そして、できれば「生まれてくる」と「生まれてこない」に分断されてしまう前を、つまり「不生」の地平に目を止めてみたい、そこから考えてみたい。

生まれてきた「いのち」だけではなく、生まれてこなかった「いのち」も大切にしたい。その上で「生まれてきたことは幸せ」、「生まれてこなかったことも幸せ」。そうした広がりの中で、生まれてきた「いのち」を大切にするという見方を持ちたい、そんなことを今日、お話したいと思いました。ありがとうございました。

一色：どうもありがとうございました。それでは、ここからは皆さん方と先生方と一緒に今日のテーマについて、いろいろと考えていきたいと思います。まずはご質問等ございますか。

一般 A：今日はありがとうございました。私たちの日常で、案外気づかなかった点をいろいろとご指摘いただけたと感謝しております。その中で私が一番考えたのは、「生まれてきた」「生まれてこなかった」の、何が「生まれてきた」のか、何が「生まれてこなかった」のか。皆さん、だいたいは私たち自身、自分だという意識で聞いていたかと思うんですが、もう少し突き詰めて、生きているとは何か、生きている我々とは何か、心なのか。生まれてきたものがなんであるかという点を、私は日頃からテーマにしております。それを言葉にすると「いのち」なんです。じゃあ「いのち」とはどういうものであるのか。今まで生きてきた「いのち」、生まれる前の「いのち」、生まれてくるであろう「いのち」。ただ、「いのち」という言葉を使うとすれば、生まれる以前、今あった、これからあるという区別はないと思うんです。そこが議論の分かれ所となると思うんですけ

れども。結局「いのち」とは、地球に「いのち」が生まれてから 38 億年という長い時間を背負った存在であるわけです。その時間的な存在であることを意識しながら、今や生まれる前、これから生まれるということを考えるのも、一つの視点ではないかなと、今日のお話を聞かせていただきました。

西平：ありがとうございます。同感です。38 億年の流れ、「不生」というのはその大いなる「いのち」の流れと重ねてよいと思います。しかし、それを大いなる「いのち」と言わず、「生まれず」という言葉で語ろうとするのは、仏教の知恵なのか、それとも、日本的知恵なのかかわからないのですが…。

一般 A：絶対的なもの、「いのち」そのものは一体何なのかと、私、日頃から悩んでおりまして、今日、先生のお話を伺って、何かヒントを得られたように思っています。今晚、よく勉強し直そうと思っています(笑)。「いのち」という点では、将来生者も死者もまったく同じであるというレベルで考えているわけですからね。死者と「いのち」が別という考えは成り立たないと思うんです。38 億年の「いのち」の流れという点から言いますとね。

西平：同感です。「生きている者」だけを中心とする見方を、どうやって相対化するか。「生きている者」だけが特権的に良いことと見ない、あるいは、「生きている者」のために他の者を利用するという、そうした見方をどう変えることができるか。

一般 A：「生きている者」が生きるためには、かつての「いのち」も必要であり、かつこれからの「いのち」も必要である。だから、現在の「いのち」が大切なんだという解釈をしているんですけども。死んだ「いのち」というものはないと思うんですよね。「いのち」に生とか死とかの区別をあまりつけないでいけたらなあ。でも現実の生活に結びつけるのは非常にむずかしいので、私はいつもあいまいな「いのち」の把握の仕方をして生きている。あまりにも割り切ってしまうと、生きていけないんじゃないかと思いますので… むずかしいですね。

一般 B：どうもありがとうございました。今日のお話を聞いて、今、世の中で自殺が多くて、そういうところに結びつきました。「いのち」を大切にしていない、自分だけが良かったらいいような感じになっているんじゃないかと思います。「いのち」は過去、現在、未来とあり、そういうことを踏まえて大切にしたいとあらためて思いました。

西平：ありがとうございます。「いのち」の大切さというところに話を繋いでいくと、理解してもらいやすいですね。

白川：あの図の「生きている者」のところが、脈々と続いてきた「いのち」の中のほんのちょっとの部分なので、その中でけんかしたり、いじめたりとか、そんなことはいかにむなしいことかと。そういう感覚でとらえられたらと思いますね。

西平：たとえば、自殺というテーマにも繋いでゆくことができるかもしれません。まだそういう話はしたことがありませんけれども、今、おっしゃってくださったように、もうちょっと「レンズを引いて」見るように、そういう視点を持てるといいなと思います。もっとも、引くだけがよいというわけではないですね。焦点を当てて見たり、引いて見たりする、そうしたカメラワークができるようになるといいですね。

一般 C：ありがとうございます。私は2、3歳児の小さな子どもに興味があって、この講演会にはよく来させてもらっています。私自身はもうすぐ古希を迎える、だんだん不安を感じるような世代ですので、今日のお話は自分自身にとってとても良かったなと思っています。この図の中で「不生」から見れば、すべて等距離になるということを伺って、安心したというか、とてもほっとしたんですね。私世代だと死がだんだん近づいてくるのがわかるし、そのことを考える時間が増えてくるわけですね。そうすると断絶されるという気持ちがとても強くなってきて、これでぶつんと終わるのかなとか、宇宙の中の一点、チリでしかないとわかっていても悲しい、もう存在しないんだなという違和感みたいなものが出てくるんですね。楽しくやっているときには忘れているんですが、今日一日を生きたと思いながら生きていけばいいのかなと思っていたんですが、この「不生」から見れば、結局はちょぼちょぼなんだと(笑)。うちの父も母ももうなくなっていますが、両親に会いに行くというんじゃなくて、連綿と続いている中に私も一緒に存在しているんだと思って、とても安心しました。以前、こちらで小林登先生の胎児のお話を伺って、受精卵は勝手に分裂する、胎児も教育を受けたり、学んでいるわけではなくて自然と発達していくという話を聞いたり、本を読んだりして発見したのは、「いのち」とは事実的なもので私たちがどうこうするもんじゃないんだなあ。白川先生がおっしゃったアイコンタクトもすごいもので、私たちが教えているわけじゃなくて、アイコンタクトすることで共振するような存在があると。

白川：子どもから発信してくるんですね。

一般 C：そうですね。アイコンタクトを持つことで共振し合う、響き合う、京都大学名誉教授のやまだようこ先生が言うところの「響きあう関係」とか、科学的にもそういう研究がなされていますが、今日のお話を伺って一緒なんだなと思いました。

一つ伺いたいのですが、今日のお話を伺って、シュタイナー教育とはちょっと神秘的な感覚なのかな、シュタイナーはそういうふう考えていたのかなと思いました。もし違っていたら教えていただきたいのですが。

西平：シュタイナーの発想とこの話は、かなり近いと思います。ないしは白川先生が作ってくださったレジメの、この円の図をみると、宇宙は、シュタイナーの場合、精神、もしくは霊と訳すか、微妙ですけども。シュタイナーは近代の科学に合うような語り方をしたんですが、東洋の伝統では「ない」ということを強調しながら、位相が違うという点を強調します。（2枚の紙を上下で平行に持ち、上から見ながら）こういうふうに上から見るとかなり似ているんですが、横から見ると位相が全然違う。僕の理解ではシュタイナーの発想とかなり重なります。そして、フレーベルはもっと近い。もう一言付け加えると、こうした話をお聞きになられても「神秘的」とは思わないですね。仏教的というか。ですから、「神秘的」という言葉で大括りにしてしまうと、ちょっともったいないような感じがします。

一般 C：シュタイナーは神秘主義者というレッテルを貼られていたものもあったので、いいんだけどよくわかんないという感じがしていたんですが、今日のお話と一緒になんだと思うととてもわかりやすくなりました。

白川：フレーベルを神秘主義者だと言う人もいますね。かなり東洋の考え方に近いのではないかなと思ったりしています。

一般 D：ありがとうございました。私は子どもの頃からわりあい、あっけらかんとしていたのですが、どうして生まれたのかとかどうして亡くなるのかというような深刻な問いとは無縁で生きてきて、毎日楽しいという感じだったのですが、学校で働くようになって、こんな能天気な私にきつという宿題が出たんだと思うんです。阪神・淡路大震災のときクラスの教え子が亡くなったんですが、自分よりずっと若い人が亡くなるとはどういうことなのかと考え込みました。生きている間にやりたいことがあるんだったらやった方がいいと思い、教師を辞めて別の仕事を始めました。今は別のかたちで若い人たちに接していますが、自分より年下の人のがんで亡くなることに寄り添ったり、親とか身近な人の死を経験したりして、生きて目が覚めたらというか生きている者はちゃんとやらんとあかんという思いがあります。若い人たちは「今日はおもしろくない」とか「しんどい」とかいろいろ愚痴を言うことが多いんですが、そういうときには亡くなった教え子のことを話して「学校に来てね」と言うんです。

西平先生の図の「生きている者」には、責任があると思うんです。「生まれなかった者」、生きたかったけれど「先に逝った者」の分も考えて、できることをやるのが大事なかと。近年、身近で亡くなる人、特に自分より若い人たちを見てきて、どうしてこんなことが起こるのかと、目に見える人に接してきたので、彼らから教えてもらったなと感じています。

先生にお尋ねしたいのですが、この図の静かに流れている「不生」のところは、西洋的に、キリスト教の世界で言うところのどこに当てはまるのでしょうか。こういうものがみんなの中心にあると言っていたら、とても心強く思ったのですが。

それともう一つ、先生がこのことを「誕生、インファンティア」に着目して解き起こしていこうとされた契機をお聞かせいただければ。

西平：まず二番目の質問から、「インファンティア」という言葉は聞き慣れない言葉ですが、英語の「インファント infant = 子ども」と同じ語源です。イタリアのある学者がもともとは「話さない者」という意味だったと説明しています。「イン」が否定形で、「話すことのない者」という意味だと。それを使って、「子どもの頃にうまく言葉にできないけれど不思議だと感じていたこと」、それを「インファンティア」という言葉で呼ぶことにしたんです。実は、この本の編集者は賛成してくれませんが、「こんなカタカナを出したら売れないですよ」と(笑)。でも、他にいい案がなかったし、この本はそんなに売れる本ではないのでいいですと開き直ったんです(笑)。

では、なぜ「子ども」だったのか、哲学の問いは、実は、子どものときに漠然と感じていた問いと似ている。その問いを大人の言葉で考え直しているだけのように感じているのです。子どものときの方がよほど深いことを感じていたのに、僕らはどんどん鈍くなってきて、というより、鈍くなることによって社会に適応するわけですが。その意味で子どもの言葉に手伝ってもらったことにしたのです。本当は僕が幼稚園に行って、子どもたちのなまの声を聞いてやれば良かったんですが、そうすると、ますます話が厄介なことになってしまうので、学生たちに子どもの頃のことを思い出して書いてもらうというかたちで、積み上げています。

もう一つの質問ですが、西洋との繋がりといったときに、話を大雑把にすると、正統派キリスト教の流れと、そこから漏れてしまった地下水脈のような思想があります。地下水脈の方は、今回のような話にかなり近いですね。正統派キリスト教というのは、これらを全部くるめて、神の視点を設定すると言うんでしょうか。創った者と創られた者という区別を作る。それがゆえに、話がとても整理されるという側面はあると思います。

それに対して、この話を、仮に東洋的な、と名付けると、僕らの生きている地平から離れたところに視点を設定せずに、内側に、生きている地平と少し違う位相を設定しようとしています。そのために、「不」だとか「無」だとか「否」だとか、「ない」という言葉を入れて違いを創り出そうとしたんだと思います。

「西洋」という言葉に関して、正統でない流れは、この話にかなり近いと僕は感じています。フレーベルは、正統からかなり離れているんじゃないでしょうか。

白川：そうですね。フレーベルはお父さんがプロテスタントの牧師なんですけれど、青年の頃、さんざん宗教問題で議論したようです。「キンダーガルテン」も神様とか偶像崇拜とかはないんです。でも神的なものっていうのはすごく感じている。「生命 Leben」とか「生命の法則 Lebensgesetz」といっています。あの時代は近代科学が発展する以前ですから、科学と宗教がごっちゃになっている時期かなと思うんですね。宗教改革の後ですし。フレーベルは汎神論者でもないんです。

一色：私は今まで子ども学をいろんな角度から見てきましたが、その点から見ると、今回は「子どもは小さな哲学者」というタイトルがいいんじゃないかなと思いました(笑)。たとえば「夢はどこにあるの?」「言葉はどうして意味することができるの?」「花は生きものだけど心はあるの?」「宇宙に終わりはあるの?」など、小さな子どもはいろんなことを言ってくれるんですよね。子どもが言ってくれるいろいろなことを、大人がちゃんと見て、やり取りをする。そのことでだんだんうまくやっていけるようになるのかなと思いました。どうもありがとうございました。